

○宮崎 陽子\*\* 岸本 幸臣\* 趙 穎\*\*

(\*大阪教育大学 \*\*大阪教育大学・院)

【研究目的】前報に同じ

【研究方法】前報に同じ

【考察結果】(各室の起居様式の実態) 起居様式を崩れ度を加味して「純床座・亜床座・純椅子座・亜椅子座」に4類型した。各公室の居室・家具構成及び起居様式をみると、食事室では「洋室-洋家具-純椅子座」が多く、『居室・家具構成・起居様式統一型』である。接客室と団らん室の居室・家具構成は「和室-和家具」と「洋室-洋家具」が1:2で2極分解し、接客室では和統一空間で床座系が9割強、洋統一空間で椅子座系が約7割で『居室・家具構成2極化・起居様式統一型』といえる。しかし団らん室では洋統一空間でも床座系が約5割と比較的高く、『居室・家具構成2極化・起居様式不統一型』である。また、各家族員でも起居傾向は違い、団らん室は起居様式が多様化し個別性を持つ空間と思われる。(家族内起居一致度) 私・父・母の起居一致度を独自に分類し、団らん室でみると床座一致が46.1%と多く、床座傾向が強い。しかし、椅子・床座混用の起居不一致家族も24.2%存在する。(居室構成別起居一致度) 和統一空間では家族全員のくつろいだ床座がみられるが、洋統一空間でも床座系が5割と室構成との不一致がみられる。(住み方と起居一致度) LDK型の住み方では椅子座一致が約6割だが、L+DK型では床座一致が6割強で逆転している。また、室機能が団らんのみでは床座一致、食事機能が付加すると椅子一致が主になる。以上、起居の実態や意識と、居室構成や機能等との相互規定関係が把握できたが、それがプランのLDK構成を住み方で多様化させることも分かった。